



まいた

令和8年度

10月号

令和8年9月28日

<http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/maita/>

「ONE TEAM」から「Our Team」へ

～子どもを幸せにする 自分も幸せになる学校づくり～

校長 鳥飼信幸

運動会シーズンとなります。本校では、運動が得意な子どもの活躍を大切にしながらも、得意・不得意に関わらず、すべての子ども一人ひとりが自分の力を発揮し達成感を味わえる運動会を行います。アンケートの結果や、本校の「運動への意欲や技能が市平均よりやや低い」という課題、学習指導要領の趣旨を踏まえ、子どもたちが運動を楽しみ、自ら参加したくなる運動会となるよう種目の見直しを行いました。今回の改善は、単なる好みや効率化ではなく、子どもたちの育ちにつながる教育的な改善です。保護者の皆様には本校のねらいや意図をご理解いただき、子どもたちに伝えていただくご協力をお願いします。「みんなが活躍できる運動会を目指していること」「勝ち負けだけではなく、挑戦することや仲間と楽しむことを大切にしていること」を、ご家庭でもぜひお話しいただければ幸いです。

運動シーズン、ラグビーシーズンが本格的にはじまります。先日、私にとって特別な時間を過ごす機会がありました。それは原点回帰する時間となりました。母校ラグビー部時代の監督の喜寿のお祝いと、日本ラグビーフットボール協会からの表彰を受けられ、その祝賀会に出席しました。会場には大先輩や当時の先輩、仲間たち、後輩が大勢集まり、高校時代の思い出話に花が咲きました。

私たちは監督を「えず」と呼んでいました。なぜ「えず?」以前、学校だより「まいた」に記載しました。「えず」は博多弁の「えずい」からきたものです。「えずい」は、「怖い」「恐ろしい」「ひびる」という意味です。この言葉通り、監督のことを想像できると思います。今回、私のテーブルへ来て直接お話をしてくださいました。「とりかい、元気か。横浜でがんばろうみたいやね。〇〇(二つ上のキャプテン)から聞いたや。横浜の校長がんばれよ」と、激励していただきました。「ハイ」と直立不動で返事をしました。なぜか高校時代を思い出した熱いものを感じました。監督は当時のオーラを放っていました。いっしょにまわっている〇〇先輩もオーラを放っていました。まさしく高校時代をふりかえる原点回帰となりました。5月に本校にも来ていただいた先輩です。

そんな監督や先輩のもと、高校時代、言葉に表すことができないぐらいの練習をしました。監督だけではなく、先輩たちも「えずい」方々ばかりでした。スクールウォーズそのものです。そんなラグビー部で、私は「俺はかなわない、上には上がいる」と感じました。

振り返れば、あの頃の練習は本当に厳しいものでした。何度も逃げ出したいとなりましたし、自分の限界を感じることもありました。母校ラグビー部の練習は、単なるスポーツや部活という言葉では表現できないほど過酷なものでした。

母校ラグビー部の夏の練習は、今振り返っても人生で最も厳しい経験の一つです。真夏の強い日差しが容赦なく照りつける中、何度もグラウンドを走り続けました。汗は止まることなく流れ、そのうち汗も出なくなり足はおもりをつけたように重くなり、何本目かも分からなくなったダッシュ。胸は破れそうに苦しく、呼吸をすると、血の味がしました。心の中で何度も弱音が出て、途中で何度も「もう無理だ」「少くらい手を抜いても分からない」「なんでここまでやらなければならないんだ」そんな思いが頭をよぎるたびに、ボールを落としてしまう。目の前が霞み、スピードが落ちかけたその時、監督の檄がグラウンドに響きました。

そんな時、仲間たちも同じ苦しさで耐えながら声を掛け合い、励まし合っていました。その姿に支えられ、私も最後までなんとか逃げることなく練習をやり抜くことができました。

自分との戦いの連続でした。「苦しい時に前へ出る一步が勝負を決めるんだ!」その言葉に押されるように再び足動かす。それでも苦しさは消えませんでした。すると、前を見ると先輩たちの姿がありました。誰よりも激しく身体をぶつけ、誰よりも大きな声を出していました。膝にテーピングを巻き、痛みを抱えているはずなのに、一切弱音を見せない。〇〇先輩です。その背中では自分たちより何倍も大きく見えました。「〇〇先輩がやっているんだ。」「ここで自分だけ止まるわけにはいかない。」自然と足が前へ出ました。コンタクト練習では何度も地面に叩きつけられました。息が詰まり、身体中が痛みました。

立ち上がるのも苦しい。そんな時、後にキャプテンになる同期の声、「ナイスプレー!」「下を向くな!」「もう一本いこう!」

入学以来、誰よりも努力する姿を見てきた仲間でした。苦しくても先頭に立ち続けるその姿が、私たちの支えになっていました。

監督の檄。先輩の背中。同期の存在。そのすべてに支えられながら、私は限界を少しずつ超えていったように思います。

この経験を通して、私は体力や技術だけでなく、苦しいことから逃げずに挑戦し続ける心を身につけました。また、一人では乗り越えられない壁も、仲間と支え合うことで乗り越えられることを学びました。灼熱のグラウンドで流した汗と涙は、私に忍耐力と仲間の大切さを教えてくれた貴重な財産です。あの夏の経験があったからこそ、今でもいろいろなことに直面したときに前を向いて挑戦することができています。

以前の話になりますが2019年ラグビーワールドカップで、日本中に感動を与えた言葉がありました。「ONE TEAM」それぞれの違いを超え、一つになる。まさに日本代表の姿そのものでした。しかし、その後、日本代表はさらなる高みを目指し、「ONE TEAM」の次の言葉として「Our Team」を掲げました。その意味は、「私たちのチーム」単に一つになるだけではありません。一人ひとりが当事者となり、自分の役割と責任を果たしながら、自分たち自身の力でチームを創り上げていくという考え方です。

「Do your job」自分の仕事をする。自分の役割を果たす。その積み重ねによって初めて、「これは私たちのチームだ」と胸を張って言えるようになるのです。私は、この考え方こそ、これからの本校に必要な姿ではないかと考えています。

これまで、「ONE TEAM」の学校づくりを進めてきました。全教職員が同じ方向を向き、「自律」「対話」「創造」の目標のもと、「子どもを幸せにする 自分も幸せになる」という方針を共有しながら歩んできました。だからこそ、

いま ほんこう こ みらい かんが わたし つぎ すす
今の本校があります。しかし、子どもたちの未来を考えたとき、私たちはさらに次のステージへ進まなければなりません。それが「Our Team」です。学校は私 だけが つくるものではありません。私 だけが 動かすものでもありません。一人ひとりの教職員が、一人ひとりの保護者が、一人ひとりの地域が「この学校は自分たちの学校だ」というおも 思いをもち、みづか かんがえ こうどう は ほんとう い み
思いをもち、自ら考え、行動し、それぞれの役割を果たしていくことで、本当の意味での「Our Team」になるのだとおも 思います。

め まえ こ しんし お あ がくしゅう まな つづ こま どうりょう こえ
目の前の子どもに真摯に向き合うこと。学習をよりよくするために学び続けること。困っている同僚に声をかけること。

ほごしや ちいき しんらい きず とくべつ ひとつひとつ だれ まか
保護者や地域との信頼を築くこと。特別なことではありません。しかし、その一つ一つを誰か任せにするのではなく、じぶんごと とく ぐ がっこう ぶんか わたし め ざ こ そだ がっこう
く、自分事として取り組むことが学校の文化をつくります。私たちが目指しているのは、「子どもが育つ学校」です。

そして、「子どもが育つ学校」とは、まず大人が学び続ける学校であり、大人が挑戦し続ける学校であり、大人がささ あ がっこう おも おとな わたし きょうしき ほんごしや ちいき かたがた
支え合う学校だと思っています。その大人とは私たち教職員・保護者・地域の方々です。

こ わたし おとな すがた み わたし じりつ こうどう こ じりつ まな わたし
子どもたちは、私たち大人の姿を見えています。私たちが自律して行動するから、子どもも自律を学ぶ。私たちが対話を大切に たいわ たいせつ こ 子どもも対話を学ぶ。私たちが新しい価値を創造するから、子どもも創造する力を ちから はぐく がっこうきょういく ほんしつ おし い かた しめ わたし かんが
育んでいく。学校教育の本質は、教えることだけではなく、生き方を示すことにあると私は考えています。

こんかい かんとく ひょうしょう ま あ あらた かん ひと そだ しごと せいか み
今回、監督の表彰を目の当たりにし、改めて感じたことがあります。人を育てる仕事は、すぐに成果が見える しごと はない わたし
仕事ではありません。約40年経って、母校ラグビー部で学んだことが基礎となり生かされていることを私はひしひ かん なが ねんげつ へ わたし じんせい なか い つづ いま しごと こんかい げんてんか いき
しと感じています。長い年月を経て、私の人生の中に生き続け、今の仕事へとつながっています。今回も原点回帰を させ じかん
させていただいた時間となりました。

だからこそ、目の前の子どもたちのために、私たちは誠実に子どもたちと向き合いたい。一人ひとりが当事者として かんが こうどう じぶん やくわり は つづ ひとり ちから あつ つく あ
考え、行動し、自分の役割を果たし続ける。その一人ひとりの力が集まり、「Our Team」を創り上げていく。

そして、「自律」「対話」「創造」の実現へ。さらにその先にある、「子どもを幸せにする 自分も幸せになる」学校へ。

これからきょうしき みんなで、保護者のみなで、地域のみなで力を合わせながら、ほんこう
創り上げていきたいと思います。今後ともご理解ご協力、応援をお願いします。

ちなみに、ラグビーの試合前にキャプテンを中心にハドル(円陣)を組んで大きな声を上げる儀式を行う大切な ぎしき
儀式があります。その意義は、「心を一にする」「自分のため」ではなく「仲間のため」に戦う気持ちを高める。 「恐怖や不安、緊張を和らげる」ルールのある喧嘩といわれるラグビー。恐怖を感じ、試合前は誰でも緊張します。 なかま かた く こえ だ あんしんかん う かくご き いた くる に
仲間と肩を組み、声を出すことで安心感が生まれます。「覚悟を決める」ラグビーは痛みや苦しさから逃げないスポーツです。覚悟を確認する場。「キャプテンのリーダーシップを示す」キャプテンの言葉によってチームの方向性 が しめ じりつ せき じん そだ かんとく い じぶん こえ あ じぶん しあい
示されます。「自律と責任を育てる」監督に言われるからではなく、自分たちで声をかけ合い、自分たちで試合に向かう姿勢を育てます。

その儀式を祝賀会の最後に行いました。最初の発声はキャプテンのみが行うことになっているのですが、その ぎしき しゅくがかい さいご おこな さいしよ はっせい おこな
発声を全員で行うという提案があり、全員で行いました。現在の母校の校長(私の高校時、同じクラス)と憧れの せんぱい だいがく
先輩(大学

じ しゃかいじん か に ほんせんしゅけん ゆうしょう かた く おお こえ わたし
時、社会人に勝って日本選手権で優勝したキャプテン)と肩を組み、大きな声をあげました。私はキャプテンで はなかつたので、感無量でした。

【お知らせ】

地震、大雨や強風の影響により、土砂災害だけでなく倒木の危険も高まっています。実際に、倒木によって道路がふさがれる事例が発生しました。

斜面や木々に近い場所では、地盤の緩みや樹木の倒壊に十分ご注意ください。また、強風時や大雨の際には不要不急の外出を控え、危険な場所には近づかないようお願いいたします。

倒木や道路の異常を発見した場合は、無理に対応せず、関係機関へご連絡ください。

子どもたちの安全確保のため、地域の皆様の安全確保のため、ご理解ご協力をお願いいたします。